野干平の創出～人形浄瑠璃「蘆屋道満大内鑑」～

文１７－５４　石尾朱里

蘆屋道満大内鑑とは

享保19年（1734）に竹本座で初演された、作者は竹田出雲、時代物の人形浄瑠璃である。信田森の狐と安倍保名の間に男児を設けたという安倍晴明出生譚、安倍保名と蘆屋道満の後継者争いの話である。しのだづまもの、と呼ばれるジャンルに分類される。

野干平とは

野干平とは、蘆屋道満大内鑑の四段目に登場する狐である。野干平は安倍保名の部下である与勘平に化けた、安倍晴明の母の仲間であった。登場シーンでは、安倍晴明と育ての母である葛葉を助ける。

野干平はどうやって誕生したのか

この作品には先行作品があり、古浄瑠璃「しのだづま」から影響が大きい。この「しのだづま」においては、野干平というキャラクターは登場していない。

野干平はどうやって誕生したのか。野干平の特徴をまとめ、「しのだづま」をはじめとするしのだづまものに分類される作品を成立順に並べて、野干平と共通点を持つキャラクターの特徴について比較する。

古浄瑠璃「しのだづま」

古浄瑠璃「しのだづま」において、主人公である保名が石川悪右衛門に捕まった時にらいはん和尚が現れる。このらいはん和尚の特徴はまとめる。

・保名を自分に託してほしいと申し出る

・保名の縄をほどくと、らいはん和尚は狐に姿をかえて、先ほど命を助けて頂いたお礼だといってさってしまう（＝人間に化けた狐）

古浄瑠璃「関東王子狐妻」

王子の森に入った者が坊主にされる話があり、命令されて悪原という侍が確かめに行く。そこで、悪原は女と出会うが、女を捕まえようとする追っ手に追われてしまう。そこに、山伏が現れて悪原を助けるが坊主にしてしまう。その後、女も追っ手も山伏も狐であったことがわかる。山伏の特徴をまとめる。

・悪原を助けるフリをする。その際、追っ手の剣を念仏によって折る

・悪原を坊主にすると、女、追っ手、山伏が狐になる。

紀海音「信田森女占」

主人公の保名が妻の葛の葉の母に頼まれて、石川悪右衛門と対決するがとらえらえてしまう。そこに六尺あまりある大男が現れて、保名を救い出し、石川悪右衛門の髪を剃って「恩は果たせた」といって消えた。この場面ついてまとめる。

・大男がきつねであるかは書かれていない。六尺、という大きさから考えると人間ではない。

・葛の葉の母が去る場面で保名が頼み事を聞き入れると、葛の葉の母もそのお付きも狐になった。

竹田出雲「蘆屋道満大内鑑」

野干平の特徴をまとめる。

・保名の部下である与勘平と同じ姿に化けた狐である（＝人間に化けれる狐）

・安倍晴明とその育ての母である葛の葉姫が悪者である石川悪右衛門に襲われた時に登場する

・与勘平とどちらが本物の与勘平であるか掛け合いで、晴明の生みの母である葛の葉（白狐）の仲間せあることを告白して、晴明を逃がすのであった。

まとめ

比較した作品を図1にまとめた。「しのだづま」に影響を受けた三作品ともに人を助けるといった行為をする存在は現れている。「関東王子狐妻」の山伏においては、「しのだづま」のらいはん和尚とキャラクターが似ている。しかし、山伏は人間を助けるフリをして騙している。「信田森女占」の大男は、石川悪右衛門から保名を逃がす時に石川悪衛門の髪を剃り落とす場面がある。また、葛の葉の母、そのお付きが狐であるという場面もあり、「関東王子狐妻」の影響を「信田森女占」は受けていると考えられる。葛の葉以外の狐が登場しているというのが「信田森女占」から、葛の葉の仲間せあると名乗って登場した「蘆屋道満大内鑑」の野干平につながるのではないかと考える。

図1

作品名	登場人物	狐かどうか	人助けをしたか
しのだづま	らいはん和尚	人に化ける狐	した
関東王子狐妻	山伏	人に化ける狐	助けるフリをした
信田森女占	大男	不明	した
蘆屋道満大内鑑	野干平	人に化ける狐	した